宇波鋳物師関連資料の調査

角田　徳幸・松尾　充晶・目次　謙一

1．はじめに

島根県安来市広瀬町宇波は、中世末から近世、近代にかけて鋳物業で栄えた地域である。飯梨川支流の宇波川に沿う谷筋に開けたところで、江戸時代は能義郡宇波村、明治時代の市町村制施行以後は能義郡布部村、昭和22年（1947）には同郡広瀬町に合併し、現在は安来市広瀬町となっている。

図１　宇波の位置

宇波を拠点とした鋳物師については、昭和２・４年（1927・29）の『島根県史』が室町～江戸時代に細田家・新石家・加藤家・山崎家の４家が鋳造業に従事したこと、嘉永３年（1850）には加藤家が家島家に鋳物職座を売り渡したことなどをいくつかの史料とともに紹介している［野津1927・1929］。昭和10年（1935）に布部村高等尋常小学校が刊行した『郷土調査』第２輯の中では、「中村工場（細田家）文書」・「中屋敷工場（山崎家）文書」のほか、鋳造法についての記載がある［大森・中西1935］。こうした成果を踏まえて、郷土史家の松本 興は昭和26年（1951）に『鋳物宇波 布部郷土史』を著し、丹念な地元調査を通して、鋳物師５家の歴史などを概説する［松本1951］。同書は、宇波の鋳物業を伝える貴重な資料として再版されており、復刻に当たっては鋳物工場の写真や「鋳物見聞記」などが加えられた［松本ほか1993］。宇波鋳物師に対する地元の関心の高まりは、鋳造された作品の調査にも繋がっている。郷土宇波を知る会と宇波公民館が刊行した『写真集 鋳物宇波』は、現存する作品を網羅的に取り上げたもので、その大要が窺える［郷土宇波を知る会・宇波公民館1996］。

宇波鋳物師の研究は、地元を中心に進められてきたところに特色がある(1)。その中で生産用具や史料の一部は、和鋼博物館や安来市歴史資料館に収蔵されている。本稿では、両館の関連資料と各地に残る伝世品などをあらためて概観することで、宇波鋳物師をめぐる研究状況を振り返ってみたい。

2．宇波鋳物師の概要

（1）中・近世の宇波鋳物師

『鋳物宇波』によれば、鋳物師５家のうち、宇波に入った時期が早いのは山崎家とされる。宇波の妙心寺住職が整理した同家の系図によれば、長禄２年（1458）に初代が河内国から出雲国に来往したとする。また、同寺の過去帳では初代の入村は永禄２年（1559）と記されているが［松本1951］、山崎家の初期の活動は確認できる史料や作品が残っていない。同家の史料には、寛政２年（1790）の「蔵人所牒」などがある［大森・中西1935］。

山崎家と姻戚関係にあった加藤家は、室町時代終わりには鋳造業を始めた可能性がある。天正20年（1592）、広瀬町巌倉寺に奉納された鉄製釣燈籠は、銘文から宇波鋳物師賀藤善兵衛が鋳造したことが明らかである［角田・目次2021］。松江市迎接寺に伝わる銅鐘は、天正３年（1575）に平浜八幡宮に納められたものだが、「鋳師大工藤原久家」の銘がある。これは賀藤善兵衛が名乗った「源久宗」に通じるとも考えられることから、迎接寺銅鐘を同氏の作とする見方があり［近藤1971］、その場合、宇波鋳物師の活動は天正３年まで遡ることになる。なお、宇波神社には慶長12年（1607）の年紀と加藤姓が墨書された棟札が伝わるという［前田1969］。

新石家は、屋号を森屋または母里屋と称し、江戸時代中期に母里村（安来市伯太町）から移ったとされる［松本1951］。新石家史料には、本稿でも紹介する元文２年（1737）の「鋳物師座法七ヶ条」、嘉永７年（1854）の新石儀兵衛宛て「鋳物師職座法之掟」などが伝わる［金子2002］。

細田家は、元禄２年（1689）に富田城下の引木町から宇波に入った［松本1951］。「鋳物師ノ旧記由来概要」によれば、同家は河内国丹南郡狭山郷日置ノ荘安比古村から、仁安元年（1166）に出雲国広瀬富田荘に移り、鋳物業に従事したという(2)。細田家史料には、後述する元文２年（1737）に細田九兵衛が受けた「御蔵宮内少輔許状」、寛政２年（1790）の細田善左衛門宛て「能登守許状」がある［大森・中西1935］。

寛政７年（1795）以前のものとされる「由緒之内旧書写」には、加藤清右衛門、山崎半七、細田善左衛門、新石文右衛門の名がみえる（表１）［中川1986］。このことから、18世紀末までには宇波鋳物師として４家が操業していたことが確認できる。この体制は幕末まで続いたが、嘉永４年（1851）に加藤家が家島家に職座を売却したことが、家島家史料「永代賣渡申鋳物職座之事」よりわかる［金子2002］。加藤家の挽型などの生産用具や史料は、この際に家島家に引き継がれたようである。

表１　出雲・石見の鋳物師一覧

史料名	能義郡					邑智郡		美濃郡	
	宇波村				小竹村	市山村	川本村	高角	中之嶋村
由緒之内旧書写 寛政７（1795）以前	加藤 清右衛門	山崎 半七	細田 善左衛門	新石 文右衛門					
諸国鋳物師名記 文政以前	加藤 惣左衛門	山崎 伴七	細田 九兵衛	新石 平兵衛		山根 陸奥大掾		山根 佐左衛門	
諸国鋳物師名寄記 文政11（1828）～嘉永５（1852）		山崎 伴左衛門	細田 市右衛門	新石 平右衛門	永江 真右衛門	山根 源太郎	山根 九郎左衛門	山根 佐太郎	（重見善兵衛） 田村與四郎
諸国鋳物師姓名記 嘉永７（1854）	加藤 清右衛門	山崎 傳吉	細田 善右衛門	新石 又左衛門		山根 陸奥大掾		山根 佐左衛門	重見 善右衛門
諸国鋳物師控帳 文久元（1861）		山崎 伊兵衛	細田 市右衛門	新石 儀兵衛	永江 新右門	山根 権平	山根 九郎左門	山根 佐太郎	田村 與四郎
禁裏諸司真継家名寄牒写 文久元（1861）	加藤 惣左衛門		細田 九兵衛	新石 平兵衛					
由緒鋳物師人名録 明治12（1879）		山崎 伴兵衛	細田 市右衛門	新石 儀兵衛	永江 真右衛門	山根 権平	山根 九郎左衛門	山根 佐多太郎	田村 與四郎

（２）近代の宇波鋳物師

明治12年（1879）の『由緒鋳物師人名録』には、能義郡宇波村として新石儀兵衛・細田市右衛門・山崎伴兵衛の３人が記される（表１）［村内1971］。幕末に新たに加わった家島家を加えた４家による操業が行われていたとみられるが、宇波鋳物師の動向に大きな変化が起きる。その契機となったのは、松江市美保関町美保神社に奉納された唐銅大手水鉢の一件である。これは明治15年（1882）から計画され、明治22・23年（1889・90）頃には山崎・新石・家島家が宇波で共同製作し苦労して美保神社へと運んだが、不況のため寄付が十分集まらず、３家の経営が傾いたというものである［松本1951］。明治14年（1881）に始まる松方デフレによる不況が経営破綻の背景にあったとみられるが、江戸時代以来の鋳造業が曲がり角を迎える時期にあったようだ。

『明治17年島根県統計書』によれば、明治13～17年（1880～1884）の間で記載がある宇波鋳物師は、中村工場（細田家）のみである（表２）。同書によれば、当時、県内の鋳物業は能義郡小竹村永江清助（安来市伯太町）、邑智郡川本村（同郡川本町）山根応信鋳物場、同郡市山村（江津市桜江町）山根権五郎鋳物場、美濃郡高津村（益田市高津町）水津治左衛門などが行っている。生産高は記録されている単位が違うため比較できないが、明治17年の延べ工員数と収入額をみると、中村工場が6,400人、2,400円と最も多く、宇波の鋳造業は県内有数の生産規模であった。

明治時代中・後期の状況は、資料上の制約から不明である。明治時代末～大正時代初期には、宇波鋳物師の県

表 2　『明治17年島根県統計書』による県内鋳物業の生産高

経営者・工場名	所在地	1880（明治13）	1881（明治14）	1882（明治15）	1883（明治16）	1884（明治17）		
		生産高	生産高	生産高	生産高	生産高	収入金	延工員数
永江清助	能義郡上小竹村	519貫	613貫	653貫	518貫	522貫	74円	60人
中村工場	能義郡宇波村	5,500貫	5,670貫	6,380貫	5,200貫	5,000貫	2,400円	6400人
山根応信鋳物場	邑智郡川本村	18,000枚	16,000枚	15,000枚	14,000枚	15,000枚	1,800円	913人
山根権五郎鋳物場	邑智郡市山村	1 ,500枚	1 ,200枚	1 ,200枚	900枚	1 ,500枚	360円	330人
青山徳右衛門	美濃郡益田本郷	120個	130個	110個		90個	30円	50人
水津治左衛門	美濃郡高津村	8,483個	11,105個	12,113個	9,538個	10,005個	1,556円	3600人
石橋伊太郎	美濃郡高津村	3,436個	3,436個	3,015個	3,027個	3,153個	440円	1800人

表 3　『明治42年島根県統計書』ほかによる県内鋳物業の生産高

工場名	島谷鋳物工場			遠所鋳物工場			中村鋳物工場		
経営者	島谷理右衛門			遠所長太郎			細田市郎右衛門		
所在地	松江市松江分			松江市乃木			能義郡布部村		
1909（明治42）	鍋釜	21,000個	7,350円	銅火鉢	1,225個	4,900円	鍋釜	3,600個	1,080円
				銅花瓶	200個	1,000円			
				銅瓶掛	183個	1,100円			
1910（明治43）	鍋釜	20,000個	10,000円	銅器	2,500個	10,000円			
1911（明治44）	銅器・鍋釜	4,500個	15,750円	銅器	3,375個	13,500円			
1912（明治45）	銅器・鍋釜	5,290個	15,870円	青銅器・銅器	3,563個	14,252円			
1913（大正2）	銅器・鍋釜	30,350個	27,400円	青銅器・銅器	4,169個	16,675円			
1914（大正3）	鍋釜	38,000個	12,000円	銅器	2,850個	10,000円	鍋釜	3,000個	1,500円
	船用発動機	18台	2,880円						
	諸機械	10,000貫	4,500円						
1915（大正4）	鍋釜	25,000個	7,000円						
	諸機械	12,000個	3,600円						
	真鍮機械	240個	720円						
1916（大正5）	鍋釜農具類	30,000個	11,000円						
	諸機械		26,800円						
1918（大正7）	鍋釜農具類	16,000貫	14,400円						
	諸機械	61,000貫	120,600円						

内の鋳物業に占める位置は徐々に低下する傾向にあったようだ。『明治42年島根県統計書』によれば、中村鋳物工場は鍋釜3,600個を製造し、生産額は1,080円であった（表 3 ）。一方、松江市島谷鋳物工場は21,000個、7,350円を記録しており、中村鋳物工場を大きく凌駕している。また、松江市遠所鋳物工場は、銅火鉢・銅花瓶・銅瓶掛1,608個を製作し、7,000円の生産額があった[(3)]。『大正 3 年島根県統計書』では、中村鋳物工場は鍋釜3,000個、生産額は1,500円あるが、島谷鋳物工場は鍋釜38,000個で12,000円、遠所鋳物工場は銅器2,850個で10,000円を記録しており、その差は大きくなるばかりであった。細田家は、その後も鍋釜や銅鐘などの製造を続けたことが残された作品などからわかるが、昭和23年（1948）に篤農家 広田亀治の銅像を鋳造したのを最後に、鋳物師の歴史に幕を下ろすことになる。

3．和鋼博物館が所蔵する資料

（1）資料の概要

和鋼博物館には宇波鋳物師を構成した細田家、新石家、家島家に由来する資料群が所蔵されている。今回、同館学芸員の竹田宏子氏、安来市文化財課高岩俊文氏の協力を得て熟覧・写真・図化等の記録をおこなった。資料の構成は大きく①鋳物師職に関わる文書・付帯具と、②鋳物を製作するための用具からなり、一覧を表 4 に示

表４　和鋼博物館所蔵　宇波鋳物師関連資料

【鋳物師職関連】

資料番号	資　料　名 （安来市取扱名称）	年　代	№等	特記事項	法　量　※mm （タテ×ヨコ×厚）
細田家資料					
1	蔵人所牒	寛政二年六月	旧県史5504-1	竪続紙・３紙・宿紙	340×1236
2	［御蔵宮内少輔許状］ (宮内少輔書)	元文二年九月		竪紙・１紙・宿紙	338×517
3	［能登守許状］ (能登守斉部宿弥書)	寛政二年六月	旧県史5504-4	竪紙・１紙・宿紙	340×501
4	蔵人所牒	天福元年十一月		竪続紙・２紙・裏打ち	320×929
5	鋳物師職座法之掟（写）	天正四年八月		竪続紙・３紙	313×1171
6	御鋳物師札（焼印付）			包紙付属	288×71×12
7	禁裏諸司札（菊紋章付）				459×99×17
8	御綸旨箱				456×97×33
新石家資料					
1	鋳物師職座法之掟	嘉永七年七月	旧県史5503-12	竪続紙・４紙	335×1637
2	鋳物師座法七ヶ条	元文二年九月		竪続紙・２紙/２紙に離れ/包紙「座法掟」	287×721
3	御綸旨箱			真継家印章文書付属	465×92×35
4	御用札				336×72×19
5	提灯				194×194×54
6	門札（停止札）				267×488×61
7	※押型No.2262～2269				
8	禁裡諸司（鋳物師札）				1265×118×6

【挽型】

資料番号	資料名	記載	使　用　者
658A	茶釜（真形）挽型	明治十一年/貳枚茶釜型/家島氏/利平作	細田家
658B	茶釜（真形）挽型	弘化二巳七月/三枚/加藤惣左衛門作	細田家
2270	足付釜挽型		家島家
2271	茶釜（真形）挽型	嘉永四歳/辛亥六月/貳枚/家島氏/栄助作	家島家
2272	茶釜（真形）挽型	安政四歳/茶釜　家島氏/家島彦三郎作	家島家
2273	風炉釜挽型	弘化二巳七月/加藤惣左衛門作/家島氏/二枚/風呂釜	家島家
2274	風炉釜挽型	安政二卯三月/壹枚八歩/家島氏	家島家
2275	羽釜挽型	弘化二巳六月/家島氏/四枚	家島家

【押型】

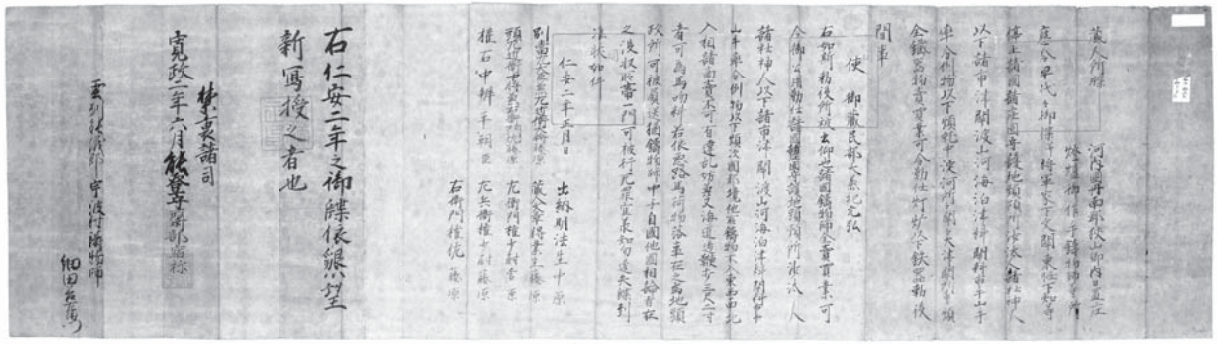
資料番号	資　料　名	記　　載	法量　※mm （タテ×ヨコ×厚）	特 記 事 項
644	浮彫押型（如来来迎）		146×120×19	新石家か
645	撞座押型（木製）	主　新石氏／源正信作	91×90×39	新石家
646	浮彫押型（木製・龍）		57×130×35	新石家か
647	浮彫押型（木製・獅子）	新石□／□□	51×83×34	新石家
648	浮彫押型（木製・牡丹）	東比田村　山本秀信作／上	51×89×32	新石家
2058	浮彫押型（木製・龍）	明治十五年一月仕立　主新石氏 ／東山本藤一源正信作	57×272×25	不明
2059	浮彫押型（木製・龍）		59×163×31	新石家か
2060	浮彫押型（木製・獅子）	新石氏□	53×81×35	新石家か
2061	浮彫押型（木製・牡丹）	主　森屋／上	52×98×33	新石家
2062	浮彫押型（陶製・種字）	「(種子バン)」	65×49×22	不明
2063	浮彫押型（陶製・文字）	「龍徳□」	104×53×17	不明
2064	浮彫押型（陶製・文字）	「福成」	108×73×24	不明
2262	浮彫押型（木製・天女）		118×187×63	新石家
2263	浮彫押型（木製・天女）		112×202×42	新石家
2264	浮彫押型（木製・天女）		109×132×24	新石家
2265	浮彫押型（木製・龍）		66×309×40	新石家
2266	浮彫押型（木製・龍）		59×312×41	新石家
2267	浮彫押型（陶製・文字）	「奉」	65×67×28	新石家
2268	浮彫押型（陶製・文字）	「献」	71×80×28	新石家
2269	浮彫押型（陶製・文字）	「明治廿」	109×45×16	新石家

【鋳型】

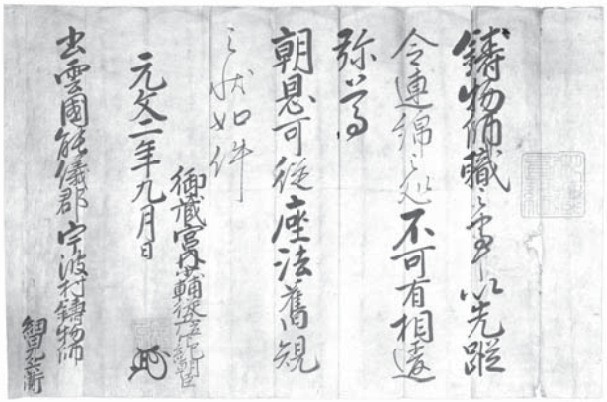
資料番号	資料名 （安来市取扱名称）	法　　量　※mm	特 記 事 項
654	鍋鋳型	径275　製品の口径220×器高100	細田家
655	鉄木呂外型		細田家
656	鉄木呂外型	基部径57×先端径30×長205	細田家
657	鉄木呂押型（木製）	334×107×107	細田家か

【製品】

資料番号	資料名 （安来市取扱名称）	備　　考	法　　量　※mm	使　用　者
659	風鐸	弘化３年、瑞光山清水寺	裾径199×高263	家島家

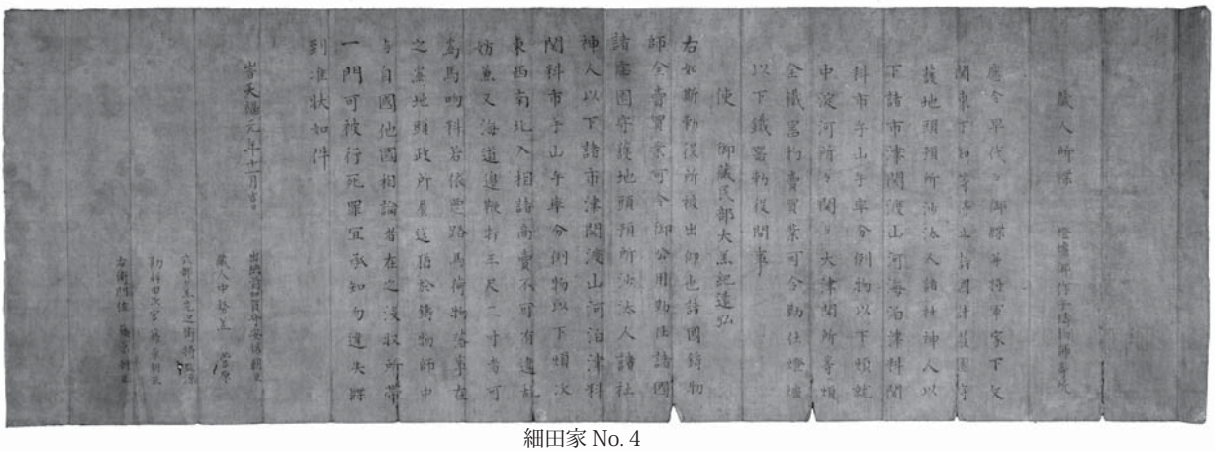


細田家 No. 1

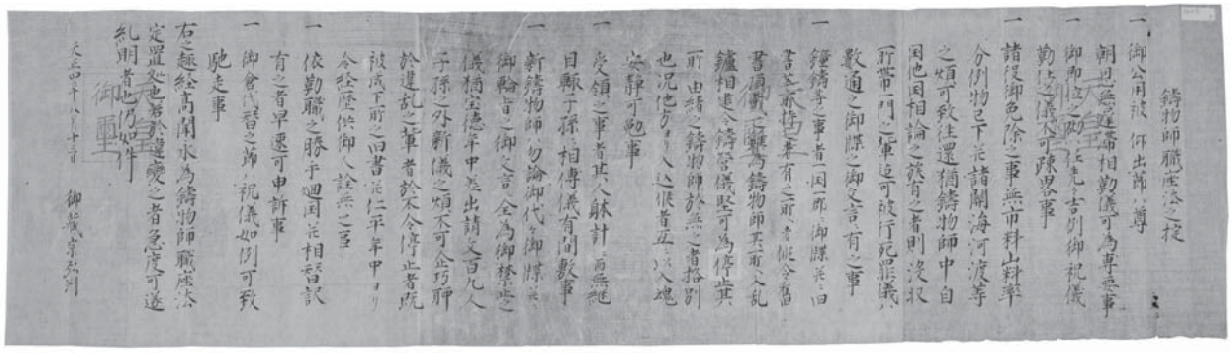


細田家 No. 2

細田家 No. 3



細田家 No. 4



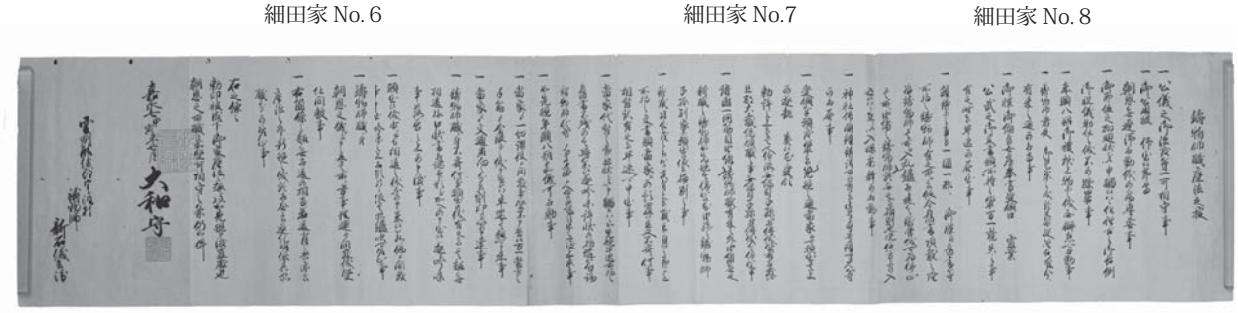
細田家 No. 5

図版 1　和鋼博物館所蔵　宇波鋳物師関連資料①

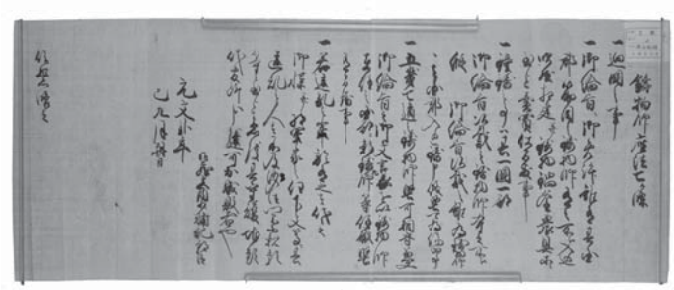
細田家 No. 6

細田家 No.7

細田家 No. 8



新石家 No. 1



新石家 No. 2

新石家 No. 3

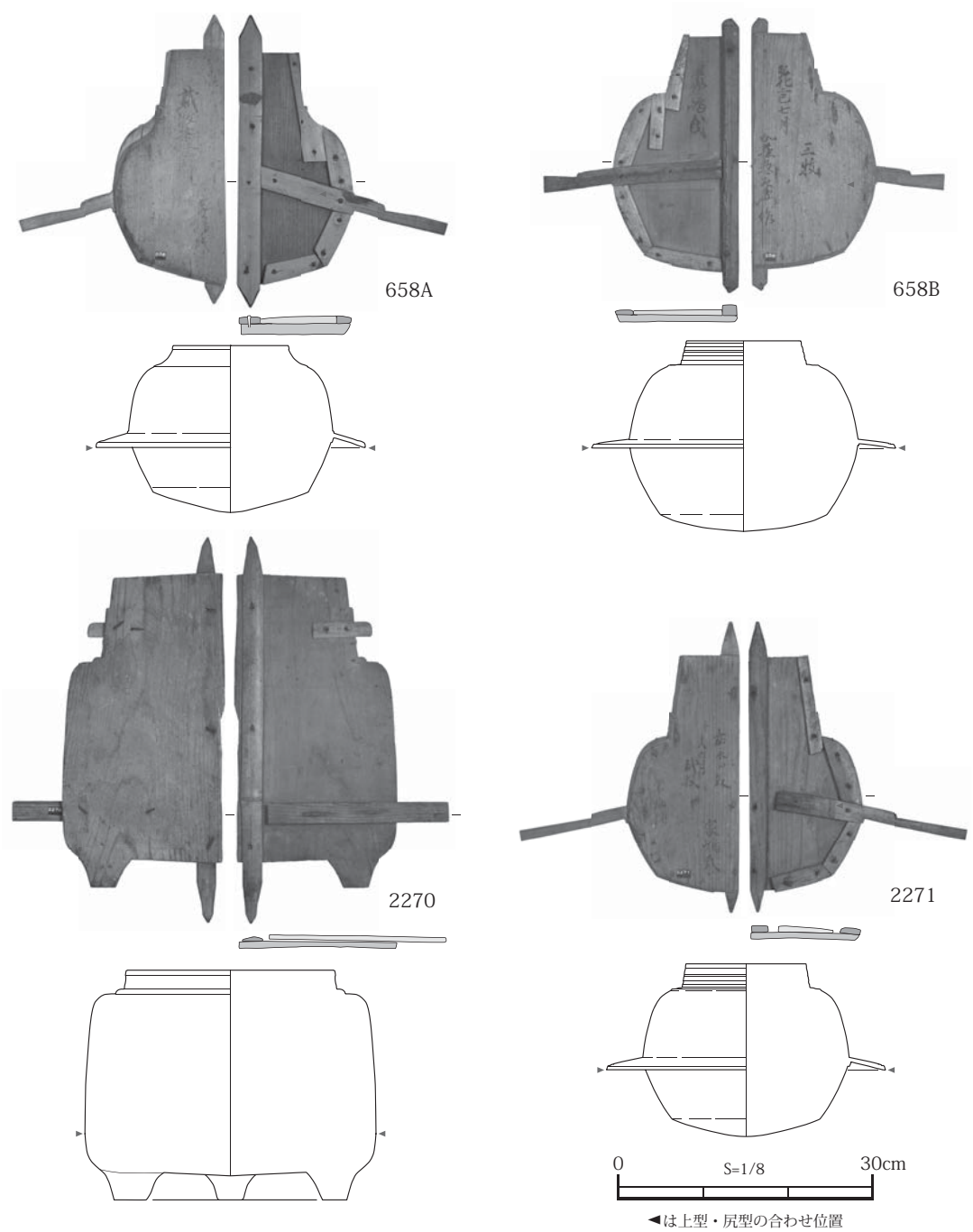
新石家 No. 8

新石家 No. 4

新石家 No. 5

新石家 No. 6

図版 2　和鋼博物館所蔵　宇波鋳物師関連資料②

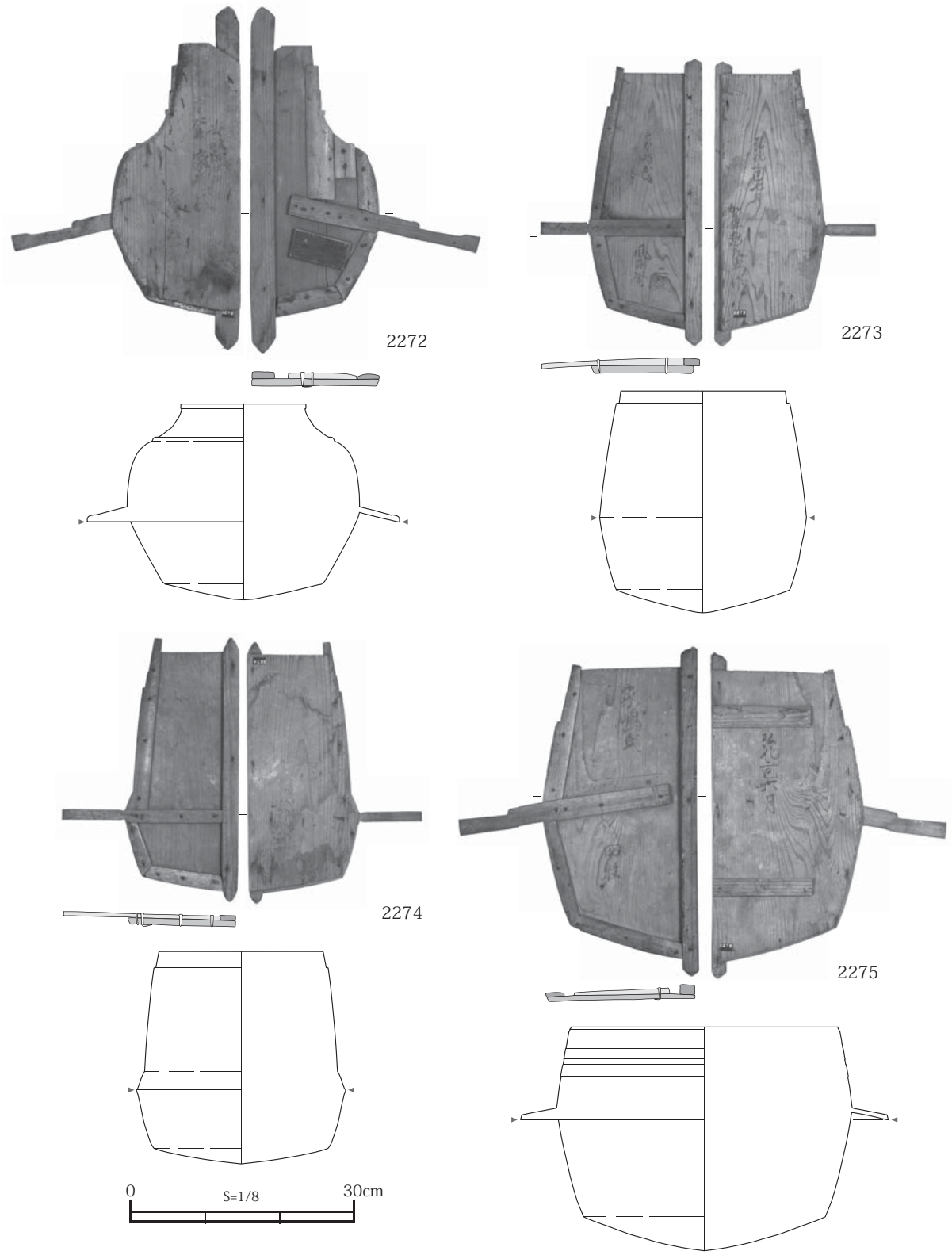


図版 3　和鋼博物館所蔵　宇波鋳物師関連資料③

した。なお本稿で記述する資料番号は、和鋼博物館の管理番号をそのまま使用している。

細田家については、元文 2 年（1737）と寛政 2 年の 2 通の許状に加えて蔵人所牒・座法といった、真継家が鋳物師に与えた各種の文書がまとまって残る点が貴重である。御綸旨箱や各種札は、真継家との関係を示す文書以外の資料として注目される。また釜の挽型や鉄木呂鋳型といった道具類も含まれている。

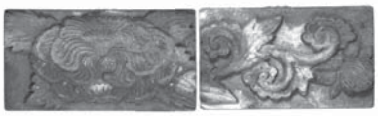
新石家については、幕末期と考えられる資料を中心に、真継家との関係を確認できる。しかし、文政11（1828）年から嘉永 5（1852）年までの期間に真継家が鋳物師を記した「諸国鋳物師名寄記」には、出雲国の部分で「新石平右衛門」が見えるため、嘉永 7 年（1854）の資料1以前から、新石家と真継家とは関係を持っていた可能性が高い。細田家と同様に、真継家との関係を示す文書以外の貴重な資料も含んでいる。また梵鐘鋳造に使用され



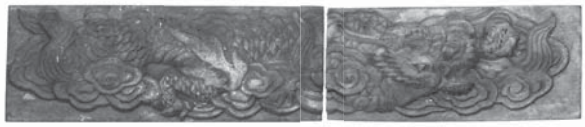
図版４　和鋼博物館所蔵　宇波鋳物師関連資料④

644

645


2061 648

647 2060


2059 646

2058

2265

2266

2262

2263

2264

2062

2063

2064

2267

2269

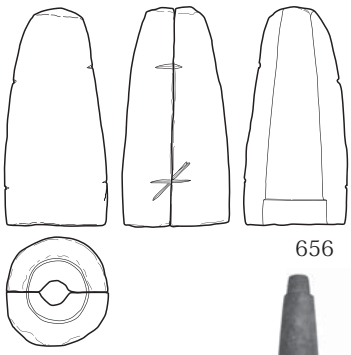
2268

0 S=1/4 10cm

656

654

655


656

657

図版 5　和鋼博物館所蔵　宇波鋳物師関連資料⑤

0 S=1/8 20cm

659

和鋼博物館所蔵

鉄灯籠

鉄鍋

銅火鉢

鉄風鈴

細田家所蔵

図版６　宇波鋳物師関連資料⑥

る押型といった道具類がある。

家島家に関して文書類は無く、鋳型製作に使用される釜の挽き型があるほか、弘化３年（1846）に鋳造された清水寺の風鐸が注目される。

なお本稿では扱わないが、その他の鋳物師関連資料として、同館には斉江家（鳥取県倉吉市）の鋳物生産道具類も所蔵されている。

（２）細田家・新石家　鋳物師関連史資料

細田家資料

１．蔵人所牒は、寛政２年（1790）６月付で真継家の当主康寧が出雲国能義郡宇波村の鋳物師細田善左衛門に与えた、仁安２年正月付蔵人所牒の写である。年月の右に「禁裏諸司」の肩書があり、「能登守齋部宿祢」の署名下に印文「康寧」の朱角印が捺されている。近世、真継家は諸国鋳物師に対し、中世以前の鋳物師の権益・由緒に関する蔵人所牒などの偽文書を写し与え、その営業を保証・統制した。真継康寧の4代前にあたる珍弘（享保17年（1732）没）は、本資料に含まれる仁安２年（1167）蔵人所牒写や、４．と同じ天福元年（1233）蔵人所牒写とする文書を鋳物師達へ配布し始めた。２．［御蔵宮内少輔許状］（宮内少輔書）は、元文２年（1737）９月付で真継家当主矩弘が「御蔵宮内少輔従五位下紀朝臣」の肩書で、出雲国能義郡宇波村の鋳物師細田九兵衛に与

えた許状である。袖に印文「御蔵真継」の朱角印、日下に印文「矩弘」の朱角印が捺され、矩弘は花押を据えている。真継家は各鋳物師の由緒を確かめ営業を保証する意図で許状を発行した。許状は宿紙を用いて権威付けがなされ、5.6センチ四方の印文「御蔵真継」朱印が袖に捺された。3．［能登守許状］（能登守齋部宿祢書）は、寛政２年（1790）６月付で真継家当主康寧が出雲国能義郡宇波村の鋳物師細田善左衛門に与えたもの。真継康寧は許状に先代量弘の作った「由緒正印」を捺しており、これもその一例である。資料１と肩書・署名・朱角印・花押が同じで、同年同月付であり、同時に発給された可能性が高いと考えられる。5．鋳物師職座法之掟（写）は、天正４年（1576）８月13日付で御蔵（真継）宗弘が定めたという体裁をとる。真継珍弘の２代後にあたる親弘（元文３年（1738）生まれ）が、旧書として天正４年銘の座法を鋳物師へ配り始めた。

6．御鋳物師札（焼印付）の表面には「禁裏諸司真継大和守支配」とあり、裏面中央の焼印の上下に「御鋳物師雲州能義郡宇波村鋳物師中」と記されている。幕末期の当主真継能弘は真継家の支配下にあることを証明する焼印札を数多く配付したという。後述の新石家資料８とともに本資料が焼印札に相当するならば、幕末期の制作と推測される。7．禁裏諸司札（菊紋章付）は、表面に十六弁菊花紋と文言「禁裡諸司」がある。裏面に文言はない。8．御綸旨箱はかぶせ蓋の木箱である。蓋の表面上下には十六弁菊花紋と五七の桐文があしらわれ、両者の間、蓋中央に「御綸旨」とある。蓋・身の外面は黒漆塗りで、菊花紋や文字は金箔仕上げである。箱身の両側面には金具により紐が付く。新石家資料３と同じく、真継家から文書や札を配付する際にこの箱が使われたのであろう。

新石家資料

1．鋳物師職座法之掟は、嘉永７年（1854）７月付で御蔵（真継）能弘が定め、その遵守を出雲国能義郡宇波村の鋳物師新石儀兵衛に求めている。署名は「大和守」で印文「能弘」の朱角印が署名の下に捺されている。年月と署名の「大」字にかけては、印文「御蔵真継」角朱印が捺されている。2．鋳物師座法七ヶ条は元文２年（1737）９月朔日付で、肩書は「御蔵宮内少輔紀朝臣」、真継矩弘が当主の時期に相当する。奥書から省略部分があることも確かで、加えて署名や当主実名の朱角印がない点から、写しとみられる。

3．御綸旨箱は木箱で、かぶせ蓋の表面上方に十六弁菊花紋、その下の蓋中央には文言「御綸旨」がある。細田家資料８とよく似たつくりだが、身の内側の黒漆塗り仕上げは異なる点である。「真継家（黒印）」と記す紙が附属する。4．御用札の表面上方には十六弁菊花紋が焼印で表される。紋の下に「御用」、その右肩に「真継家」と墨書がある。文字がない裏面の中央と下部の２か所にある凸部の穴へ、下方から１本の柄を通して入れる。細田家資料６と同じく、本資料も焼印札ならば、真継能弘が当主であった幕末期の制作と推測される。5．提灯は、筥（はこ）提灯と推定される。紙製の胴を折り畳むと上下の木枠が組み合わさって小さくまとまる。上面中央では方形の木蓋が開閉し、畳んだ状態でも提灯内で点火できる仕組みを持つ。胴の一方には十六弁菊花紋が描かれ、反対側には「御用」とある。これらから推測して、本資料は真継家から新石家にもたらされたものであろう。6．門札（停止札）はいわゆる高札で、おそらくは真継家が、朝廷・幕府権威の鋳物師への付与と、その営みが円滑に進むことの補助を目的に制作させたと考えておきたい。「京都奉行所」の文言から近世のものと推定できよう。高札の形状から、鋳物師の作業場所へ掲出して使用することを念頭に制作されたとみられるが、ほぼ未使用といってよい状態である。実際に使用された可能性は低いのではないだろうか。8．禁裡諸司（鋳物師札）は、表面中央付近に「真継大和守支配」、その右肩に「禁裏諸司」、下寄りに「御鋳物師」とある。裏面に文言はない。新石家資料４・細田家資料６・７と比較して、はるかに長い板で制作されている。「真継大和守」は新石家資料1を発給した真継能弘であり、本資料は幕末期の制作と推定される。

（３）鋳物製作用具

鋳型を成形するために使用される①釜の挽型８点、②梵鐘類の押型20点、さらに③鋳型そのもの４点、④鋳造

製品１点がある。

①挽型は「引き型」「木型」とも呼ばれ、軸を中心に回転させることで釜の上型・尻型を成形するためのもの。細田家２点、家島家６点あり、幕末（弘化～安政）・明治の年紀墨書がある。また658Bと2273はもと加藤家の作であるが、職座の売渡しとともに家島家へ渡ったことが墨書からうかがえる。素材はいずれも竹・針葉樹（スギか）の板で、軸・縁・引き手を鉄釘で固定している。図版３・４には、この挽型から成形される製品の形態を復元的に示した。製品は４種の鉄釜で、ア．胴部中位に羽をつけ、頸部から口縁をしぼったもの（658A、658B、2271、2272）、イ．羽が無く体部が直線的で直立するもの（2273、2274）、ウ．羽をつけ口縁が直立する羽釜（2275）、エ．羽根がない足付釜（2270）に分類される。アは芦屋釜の真形（しんなり）型と呼ばれるものに近く、挽型自体には「茶釜」と注記される。「風呂釜」（風炉釜）と注記されるイとともに容量が小さく、ア・イはいわゆる茶の湯釜の挽型とみられる。

②は梵鐘類の外型を成形するために使用される、いわゆる雄型で、撞座・装飾意匠・銘文が浮彫状にレリーフされる。来歴がわかるものは全て新石家のもので、明治15年・20年の年紀がある。素材は木製彫刻と塑像陶製の2種があり、前者には彫刻師とみられる東比田村の山本正信・秀信の作者銘が書かれたものが３点ある（645、648、2058）。

③は細田家での鋳造に実際に使用されたとみられる鋳型である。個々の鋳型は長期の連続使用を前提にしておらず、廃業後まで保管されるケースは少ないことから稀少な資料といえる。654は鉄鍋の外型で、外側を３段の竹タガで締める。製品の形態は無足丸底の片口で、弦をかけるための耳が３方に付く。655・656はたたら吹きの製鉄炉へ風を送るための送風管（鉄木呂）を鋳造するための外型で、657はその外型を成形するための雄型である。これらは、当地域で盛行したたたら製鉄に必要な道具を、専業鋳物師に外部発注して生産していたことを示す興味深い資料である。

④和鋼博物館には宇波鋳物師の製品として青銅製の風鐸1点が所蔵されている。同館資料カードによれば、弘化３年（1846）６月に鋳造され瑞光山清水寺（安来市清水町）の三重塔に架けられていたものが、昭和39年10月の大修理時に更新されることになって下ろされ寄贈されたものとされる。また同カードには「鋳物師　家島柳右衛門宣鄰・新石平右衛門実久／細工人　山崎伴兵衛光久・門渕善三郎大膳大夫満久」と記載がある。頂部に一文字の湯口が1箇所認められる。舌は残存していない。

（４）細田家所蔵資料

和鋼博物館所蔵品ではないが、以下に宇波鋳物師の製品をあわせて紹介しておく。宇波には昭和23年まで鋳造業を営んだ細田家の鋳物工場跡があり、その本宅である細田美沙男氏宅には図版６に写真を掲げた鉄製の燈籠・鍋・風鈴と銅製火鉢が残されている。鉄製燈籠の火袋には細田家の屋号商号である「中村屋」の「中」の文字があらわされている。

４．安来市立歴史資料館が所蔵する資料

（１）資料の概要

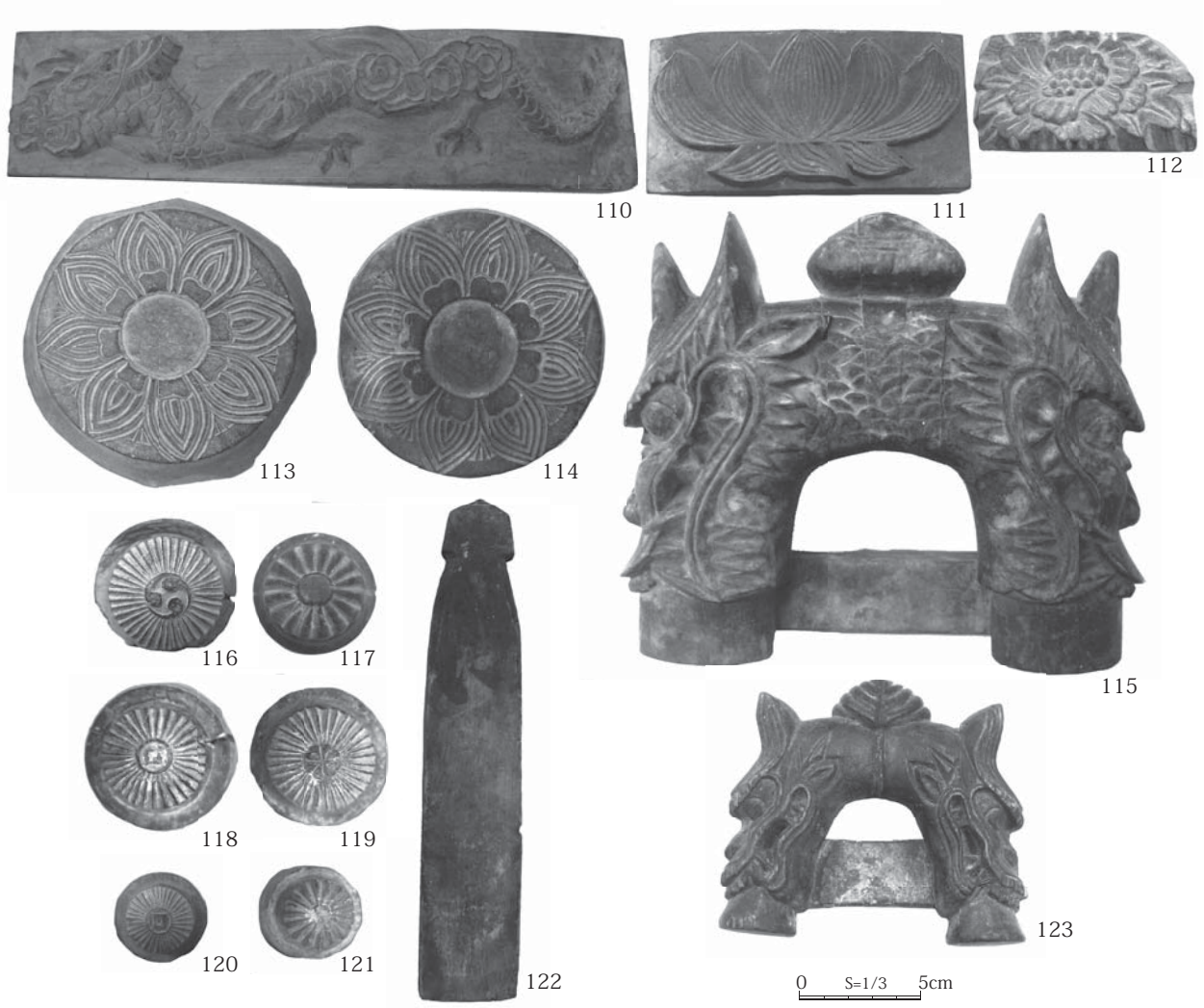
宇波が所在する旧広瀬町の資料館であった安来市立歴史資料館には、宇波鋳物師に由来する梵鐘類の木型（押型）123点が所蔵されている。126のみ細田家のもので、残る全ては新石家のものである。今回、同館の金子義明氏の協力を得て、熟覧と写真撮影等の資料調査をおこなった。

（２）鋳物製作用具

資料の大半は銘文の押型で109点を占める。１～86は１文字ずつを陽刻したもので、山号寺名や念仏名号、願

図版７　安来市立歴史資料館所蔵　宇波鋳物師関連資料①

図版８　安来市立歴史資料館所蔵　宇波鋳物師関連資料②



図版 9　安来市立歴史資料館所蔵　宇波鋳物師関連資料③

表 5　安来市立歴史資料館所蔵　宇波鋳物師関連資料①

番号		備考	文字寸法（金子氏計測）		全体寸法		
			タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	厚
1	「功」		20.4	33.4	33	39	14
2	「寺」	裏墨書「寺」	34.0	30.1	34	39	13
3	「雲」	虫食い	35.0	35.8	40	44	18
4	「洞」		27.5	27.0	31	51	27
5	「光」		25.0	38.0	29	49	25
6	「大」		28.0	40.0	34	46	24
7	「方」		25.7	30.8	34	45	24
8	「家」	虫食い	31.4	33.4	36	48	24
9	「岩」	虫食い	40.1	30.0	42	39	21
10	「村」		35.0	38.0	41	44	18
11	「松」		23.0	33.4	44	43	22
12	「鋳」		39.7	35.0			
13	「意」	裏墨書「森　九之内」	41.0	32.0	45	38	16
14	「日」		28.0	23.6	48	47	17
15	「仙」		34.7	40.0	43	49	23
16	「壺」	虫食い	40.5	38.3	44	55	24
17	「谷」		36.3	47.0	52	47	15
18	「禅」	虫食い	40.5	45.0	45	51	14
19	「新」		40.5	40.4	47	43	15
20	「取」		31.0	41.0	83	54	20
21	「専」	裏墨線	53.2	37.0	58	52	11
22	「寺」	裏墨線	52.2	43.0	65	57	19
23	「寿」	裏墨線 虫食い	50.5	44.0	58	57	24

番号		備考	文字寸法（金子氏計測）		全体寸法		
			タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	厚
24	「禅」		42.0	42.5	45	54	23
25	「願」		39.3	47.0	86	53	19
26	「温」		42.0	46.4	53	50	28
27	「妙」		39.0	59.0	51	54	24
28	「成」		45.0	50.0	52	55	22
29	「仲」	虫食い	47.0	44.0	56	52	20
30	「御」		44.4	46.0	52	58	23
31	「観」		55.0	47.8	58	55	24
32	「鏡」		45.0	53.0	55	58	27
33	「圓」		47.2	42.0	57	57	27
34	「三」		32.0	52.4	48	62	24
35	「現」		40.0	47.0			
36	「禅」		45.0	47.0	57	58	22
37	「永」		45.0	53.0			
38	「正」		40.0	54.0	54	65	20
39	「蔵」		45.0	41.0			
40	「禅」	裏墨書「禅」	56.0	52.3	60	58	20
41	「郷」	裏墨書「郷」	57.0	52.0	59	58	17
42	「無」	裏墨書「弐」	43.0	63.0	57	63	23
43	「栄」		59.7	50.3	67	60	30
44	「等」	虫食い	61.0	41.0	69	55	26
45	「金」	虫食い	47.7	65.0	60	69	25
46	「洞」		47.0	44.0	64	65	23

表６　安来市立歴史資料館所蔵　宇波鋳物師関連資料②

番号		備考	文字寸法（金子氏計測）		全体寸法		
			タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	厚
47	「和泉」		60.7	52	64	55	18
48	「光」		52	61	67	65	22
49	「雲」		50.2	41			
50	「祥」		53.5	52	73	66	23
51	「國」		58	46			
52	「領」		56	66	58	68	24
53	「下」		47	49			
54	「廣」	虫食い	65.2	55.8	73	64	21
55	「泰」		56.2	61			
56	「君」		60	60	74	65	23
57	「寺」		67	52			
58	「長」	裏墨書「東一」	67	71	72	77	14
59	「澤」	裏墨書「東二」	68	62	76	74	19
60	「新」	裏墨書「西五」	57	62.4	61	67	19
61	「鋳」	裏墨書「西六」	64	64	70	76	15
62	「禅」		62.6	69.2	70	74	13
63	「奉」	裏刻書「上」	82	74	88	78	15
64	「納」	裏刻書「上」	76	76	89	83	16
65	「寶」	虫食い	76	53	78	61	15
66	「樹」		64.2	71	70	79	15
67	「無」	虫食い	57.2	64.0	77	75	23
68	「常」	裏墨書「明和八卯四月吉日　上四古」	62.0	59.7	76	72	20
69	「瑞」	側墨書「めでたく」裏墨書「明和九年宇波村上壱古除キ」	60.0	52.0	75	61	24
70	「無」	裏墨書「上三□」虫食い	62.2	52.0	75	70	25
71	「滅」	裏墨書「めつ　上七ノ十四」虫食い	61.8	59.0	71	71	25
72	「巳」	裏墨書「い　上十貳　拾弐」	61.0	50.0	75	68	29
73	「諸」	裏墨書「諸　上□」	60.2	60.0	74	76	27
74	「楽」	裏墨書「らく　上十六」	64.0	57.2	76	72	28
75	「無」	裏墨書「無　上三　上三」	62.7	59.0	72	74	28
76	「簾」	裏墨書「上十五古」虫食い	60.8	48.6	83	66	23
77	「是」	裏墨書「是五　上五」	60.0	60.0	73	77	29
78	「常」	裏墨書「常常　上四　上四」	61.0	59.6	71	74	27
79	「滅」	裏墨書「上めつ十ノ十一　めつ?」	60.3	55.8	76	73	24
80	「南」	裏墨書「南無一」	71.8	63.0	85	83	18
81	「無」	裏墨書「無二」	66.2	62.7	86	85	19
82	「弥」	裏墨書「弥四」	68.2	69.8	84	84	18
83	「陀」	裏墨書「陀五」	67.0	69.0	85	86	19
84	「南」	虫食い	80.0	56.2	96	81	25
85	「陀」	裏墨書「一」	71.0	68.9	96	81	29
86	「佛」	裏墨書「二」	75.0	77.2	87	89	28
87	「（梵字）サ」	裏墨書「中」	68.0	55.2	100	56	21
88	「（梵字）ベイ」	裏墨書「□□」	71.0	53.0	98	55	21
89	「施主當邑池之端」	裏墨書「新石儀兵衛造之」側墨書「壱の七壱百八拾字　四十字間少引」	121.0	23.2	125	28	17
90	「江角□蔵」	裏墨書「細工義隆」側墨書「勝原久實　藤勝原四」	78.0	21.0	82	24	16
91	「妙心寺什」	虫食い	77.2	24.0	81	42	17
92	「英林山（花押）」		110.0	30.0	114	30	14
93	「當山六世實●負叟」		193.0	27.0	202	35	16
94	「慶敬」		52.0	32.0	58	36	24
95	「定四郎」	虫食い	120.0	29.6	136	40	25
96	「右衛門」	裏墨書「森脇」	73.0	30.0	86	43	25
97	「上山村」		76.0	34.2	77	39	15
98	「福庭吉郎」		101.0	30.2	105	43	25
99	「寂滅爲樂」	虫食い	100.0	34.0	111	43	15
100	「諸行無常」		108.0	35.3	119	44	15
101	「當寺六世爲隆観」		215.0	32.0	216	30	16
102	「前桐岳十八世雲」		211.0	32.0	213	31	15
103	「乙巳仲春十五日新添焉」		198.0	34.0	206	45	15
104	「爲清光大雄峯老和尚」		257.0	35.0	269	39	22
105	「光仁」		88.7	52.0	116	58	20
106	「門寺」		98.2	40.0	105	52	20
107	「郡阿用村」		196.0	53.0	200	52	25
108	「明峰山蓮」		200.0	51.0	201	50	27
109	「十一世道竺」		205.0	50.0	210	49	25
110	胴部文様　龍華文		57.0	255.0	60	153	33
111	胴部文様　華文（蓮）		62.0	124.0	64	126	29
112	胴部文様　華文	牡丹　刻書「上」	43.0	80.0	46	84	39
113	撞座　蓮華文	墨書「壱尺八寸」	径104.0		径115		
114	撞座　蓮華文		径113.0		径115		
115	龍頭	五枚板継ぎ	188.0	218.0	180	210	52

表７　安来市立歴史資料館所蔵　宇波鋳物師関連資料③

番号		備考	文字寸法（金子氏計測）		全体寸法		
			R	R'	L	ヨコ	厚
116	乳	三巴文、筋37間	55.2	51.2	46.0	179	65
117	乳	筋16間	32.2	30.0	27.0	146	43
118	乳	丸釘抜文、筋31間、刻書「弐尺」	33.0	30.0	28.0	155	44
119	乳	浮草文、筋32間、刻書「二尺一寸」	34.0	32.0	28.0	134	44
120	乳	丸釘抜文、筋34間	33.0	30.0	29.0	104	44
121	乳	石製、筋16間、刻書「一尺三寸　天明三卯二月惣右衛門」	26.0	22.0	21.0	114	33
122	（用途不明）	墨書「に」	34.0	172.0	169	33	16
123	龍頭	刻書「中村」本資料のみ中村屋から入手	114.0	125.0	108	124	29

文を構成する文字とみられる。86は梵字サ（聖観音種子）、87はベイ（薬師観音種子）。88～109は複数文字からなる銘文押型で、内容は山号寺名（106、108など）、僧名（93、104など）、施主名（89など）といった製作の経緯、発注者の地域をうかがわせるものである。十分に分析できていないが、91は宇波村妙心寺の什物、107・108「郡阿用村」「明峰山蓮」は雲南市大東町東阿用に所在する明峰山蓮花寺の梵鐘銘であることがわかる。また「上山村」は現島根県雲南市吉田町上山または大田市三瓶町上山であろう。

110～112は龍文・蓮華文などの文様意匠、113・114は撞座、116～121は乳の押型である。122も梵鐘類の木型とみられるが用途不明。竜頭木型は２点で、梵鐘用とみられる115と、半鐘用の123がある。

５．伝世する宇波鋳物師の製品

（１）中・近世

宇波鋳物師の作である旨を記した銘文をもつ作品のうち、現在のところ最も遡るのは、天正20年（1592）に賀藤善兵衛が鋳造した巖倉寺の鉄製釣燈籠である（表８）。賀藤善兵衛は、同年の出雲大社銅鳥居、文禄４年（1595）の安来市清水寺銅鰐口も製作した。慶長20年（1615）の広島県庄原市一野宮神社の鉄製鰐口も賀藤善兵衛と記されるが、元和4年（1618）の西ノ島町焼火神社銅鐘には加藤茂兵衛の息として善兵衛の名がみえるので、別人物の可能性がある。加藤家の作品には、この他に宝暦２年（1752）に加藤惣右衛門が作った雲樹寺銅鐘もあるが、16世紀末～18世紀半ばと比較的古い時期のものが多い。また、鉄製鋳物は、上述の２例以外は知られていない。

山崎家は加藤家と並び、早くから宇波に定着した鋳物師とされるが、伝世資料は少ない。確認できるものでは、寛保３年（1743）の出雲市正応寺銅鐘が古い。嘉永７年（1854）の妙心寺銅雲板、安政６年（1859）には安来市清水寺の三重塔銅九輪は山崎伴兵衛の作であり、幕末にかけての活動が窺える。

細田家と新石家は、宇波鋳物師の中では後出であるが、残された作品も18世紀後葉～19世紀と新しい時期のものが多い。天明元年（1781）の広瀬町清水坂寺の銅鐘は細田善左衛門・助右衛門が鋳造したもので、両家の中では古い。新石家の作品は、幕末しか知られておらず、嘉永６年（1853）の広瀬町光蓮寺銅鐘、安政３年（1856）の広瀬町本成寺銅鐘[4]がある。

家島家は、史料によれば嘉永４年（1851）に加藤家の職座を買い受けている。一方、天保10年（1839）の安来市松源寺銅鐘、弘化３年（1846）の雲樹寺銅雲板には家嶋柳右衛門の名があり、家島家は職座を買い取る前から鋳造業に乗り出していたことが確認できる。

（２）近代

安来市清水寺本堂では、明治19年（1886）に大規模な修理が行われた。この際に縁高欄の金物は取り替えられており［文建協編1992］、銅擬宝珠には新石久兵衛・細田市郎右衛門の名がある。これに近い頃、山崎伴兵衛・

表８　宇波鋳物師の製品

	製品名	寄進先（所有者）	所在地	製作年	製作者	文献等
1	銅鐘	迎接寺	島根県松江市八幡町	天正３（1575）	藤原久家	近藤正1971
2	鉄釣燈籠	巌倉寺	島根県安来市広瀬町	天正20（1592）	賀藤善兵衛	角田・目次2021
3	銅鳥居	出雲大社	島根県出雲市大社町	天正20（1592）	賀藤善兵衛	大社町1997
4	銅鰐口	清水寺	島根県安来市清水町	文禄４（1595）	賀藤善兵衛	角田・目次2021
5	鉄鰐口	大屋八幡宮（一野宮神社）	広島県庄原市西城町	慶長20（1615）	賀藤善兵衛	
6	銅鐘	雲上寺（焼火神社）	島根県隠岐郡西ノ島町	元和４（1618）	加藤茂兵衛	近藤1971
7	銅鐘	正応寺	島根県出雲市稗原町	寛保３（1743）	山﨑伴兵衛	守岡正司のご教示による
8	銅鐘	雲樹寺	島根県安来市清井町	宝暦２（1752）	加藤惣右衛門	藤間1988
9	銅鐘	清水坂寺	島根県安来市広瀬町祖父谷	天明元（1781）	細田善左衛門 細田助右衛門	郷土宇波を知る会ほか1996
10	銅鐘	無量寺	島根県安来市広瀬町東比田	天保４（1833）	山崎伊兵衛	広瀬町史編纂委員会編1968
11	銅鐘	坊床山	島根県安来市広瀬町祖父谷	天保７（1836）	山﨑伴兵衛	比田村史編纂委員会編1954
12	銅鐘	松源寺	島根県安来市安来町	天保10（1839）	家島柳右衛門 新石平右衛門	松本1951、広瀬町史編纂委員会編1968
13	銅雲板	雲樹寺	島根県安来市清井町	弘化３（1846）	家嶋柳右衛門	藤間1988
14	銅風鐸	清水寺（和鋼博物館）	島根県安来市清水町	弘化３（1846）	家嶋柳右衛門 新石平右衛門 山崎伴兵衛 門渕善三郎	本報告
15	銅鐘	光蓮寺	島根県安来市広瀬町上山佐	嘉永６（1853）	新石義兵衛	郷土宇波を知る会ほか1996
16	銅雲板	妙心寺	島根県安来市広瀬町宇波	嘉永７（1854）	山﨑伴兵衛	
17	銅鐘	本成寺	島根県安来市広瀬町石原	安政３（1856）	新石久兵衛	高岩俊文氏のご教示による
18	銅九輪	清水寺	島根県安来市清水町	安政６（1859）	山﨑伴兵衛	郷土宇波を知る会ほか1996
19	銅擬宝珠	清水寺	島根県安来市清水町	明治19（1886）	新石久兵衛 細田市郎右ェ門	
20	銅手水鉢	美保神社	島根県松江市美保関町	明治22･23（1889・90）	山﨑伴兵衛 新石久兵衛 家島台次郎	松本1951 郷土宇波を知る会ほか1996
21	銅鑼	宇波毘沙門堂（宇波交流センター）	島根県安来市広瀬町宇波	明治36（1903）	山﨑常太郎	高岩俊文氏のご教示による
22	銅鐘	十満寺	島根県仁多郡奥出雲町亀嵩	大正５（1915）	細田精一 家島　豊	郷土宇波を知る会ほか1996
23	銅ベルトン水車	安来市歴史資料館	島根県安来市広瀬町	大正10（1921）	細田　環	
24	銅報鐘	宇波小学校（宇波交流センター）	島根県安来市広瀬町宇波	大正10（1921）	細田精一	
25	銅慰霊碑	西八幡宮	島根県安来市伯太町	大正15（1926）	細田市郎右ェ門	
26	銅鐘	大日如来堂	島根県安来市広瀬町下山佐	昭和４（1929）	細田市郎右ェ門	
27	銅牛臥像	縄久利神社	島根県安来市広瀬町東比田	昭和５（1930）	細田市郎右ェ門	
28	銅像		島根県安来市荒島町	昭和23（1948）	細田精一	

※製作者がわかるもの。記録のみ残る製品を含む。

新石久兵衛・家島台次郎が共同で進めた美保神社唐銅大手水鉢は、戦時中の金属供出により現存しないが、木型が宇波妙心寺に残されている。

明治20年代頃から細田家以外の宇波鋳物師は生産を縮小したが、廃業したわけではなかったようだ。宇波地内の毘沙門堂にあった銅鑼は、明治36年（1903）に山崎伴兵衛が製作したもので、大正５年（1916）の奥出雲町十満寺銅鐘は、細田精一と家島豊が鋳造した。しかし、大正時代以降の作品で残るのは、ほとんどが細田家の鋳造である。昭和４年（1929）の広瀬町大日如来堂銅鐘のように伝統的な作品を制作する一方で、銅ベルトン水車、銅慰霊碑、銅像なども手がける。近代化により鍋釜など日用品の大量生産が進む中で、多様な作品を製作することによって存続を図ったことが窺える。

６．おわりに

本稿では、中世末～近代の出雲における鋳造業の拠点であった宇波地域に焦点をあてた。宇波鋳物師の来歴やその製品に関する地域的研究は先学による蓄積がある。本稿はそれを踏まえて歴史的経緯を総覧したうえで、市内の博物館施設の所蔵品について資料化をおこなった。具体的には鋳物師職許状等の文書や、鋳造に用いられる用具類である。また各地に現存する宇波鋳物師の製品についても、情報を整理してまとめた。これらは基礎的な

仕事ではあるが、今後、広域な視野で手工業生産・流通を分析し、さらに当地域の特質を明らかにする総体的研究を進めるうえでは不可欠な作業と位置づけたい。

【註】

（1）安来市宇波交流センターは、宇波鋳物師が製作した鋳物の収集を進めており、将来的には鋳物づくりの歴史がわかる展示を目指しているという（『朝日新聞』2008年5月31日付け島根版）。

（2）島根県立図書館蔵「鋳物師ノ旧記由来概要」は、大正4年（1915）に細田儀三郎蔵の原本より写されたものである。

（3）明治43年（1910）の『松江商工彙報』第壱号には、松江市の銅器について「銅器製作の巧緻なるは高岡産に比して遜色なく、古色蒼然たるもの華麗なるもの技術の妙を極め着色亦佳なり、概ね地方の需要に供す、就業戸数二戸にして職工男女十五名を使役し一ヶ年産額壱万弐参千円あり将来発達の見込あり、近時大坂其他に販売するに至れり。」と記される［松江市史編集委員会2019］。

（4）本成寺銅鐘には安政3年のほか、明治20年（1887）の年紀も記されており、明治期に下る可能性もある。

【引用・参考文献】

大森敬夫・中西赳夫1935『郷土調査』第2輯、布部村尋常高等小学校
角田徳幸・目次謙一2021「安来市巌倉寺の鉄製釣燈籠」『古代文化研究』第29号、島根県古代文化センター
金子義明2002「出雲の鋳物師」『季刊文化財』第99号、島根県文化財愛護協会
郷土宇波を知る会・宇波公民館1996『写真集 鋳物宇波』
近藤正1971「島根県下の銅鐘について」『島根県文化財調査報告』第7集、島根県教育委員会
笹本正治1983「近世の鋳物師と鍛冶」『講座・日本技術の社会史 第五巻 採鉱と冶金』日本評論社
大社町1997「2371　毛利輝元建立銘写（佐草家文書）」『大社町史 史料編（古代・中世） 下巻』
藤間　亨1988「雲樹寺の工芸品について」『雲樹寺所蔵歴史資料調査報告書』島根県教育委員会
中川弘泰1986『近世鋳物師社会の構造』近藤出版社
中野俊雄2005「茶の湯釜と鉄瓶の歴史と替底方法」『鋳造工学』第77巻第2号、日本鋳造工学会
野津左馬之助1927『島根県史 六 』島根県学務部島根県史編纂掛編、島根県
野津左馬之助1929『島根県史 八 』島根県学務部島根県史編纂掛編、島根県
比田村史編纂委員会編1954『比田村史』比田村文化協会村史編纂委員会
広瀬町史編纂委員会編1968『広瀬町史』広瀬町役場
文化財建造物保存協会編1992『重要文化財清水寺本堂保存修理工事報告書』清水寺
前田泰次1969「雲州宇波鋳物師について」『Museum』第221号、東京国立博物館
松江市史編集委員会2019『松江市史 史料編10 近現代Ⅱ』松江市
松本　興1951『鋳物宇波　布部郷土史』宇波小学校
松本　興ほか1993『鋳物宇波　布部郷土史』（復刻版）宇波小学校
村内政雄1971「由緒鋳物師人名録」『東京国立博物館紀要』 7 、東京国立博物館